

# 小学校教諭を目指す大学生の体育授業効力感

## ：実践的指導経験との関係

Efficacy of Physical Education Class of university students to become elementary school teachers

： Relationship with practical teaching experience

児童教育学科 長谷川 望 木村 博人

### 1. はじめに

近年、教員養成を行っている大学や学部においては、教育課程におけるカリキュラム、科目の精選及び教職課程の質保証・向上、そして実践的指導力の育成に注力している。その背景として、中央教育審議会の2006年答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」がある（文部科学省 2006）。答申においては、教員が備えるべき資質能力については、例えば使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力、コミュニケーション能力などをあげており、養成段階において教員としての資質能力を確実に保証するための方策の必要性を指摘している。また、中央教育審議会の2015年答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員養成コミュニティの構築に向けて～（答申）」がある（文部科学省 2015）。答申では、①教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修を行う段階であることを認識する必要があること、②実践的指導力の基礎の育成に資するとともに、教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせる機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させることが必要であること、③教職課程の質保証・向上のための評価制度の必要性、④学校現場の要望に柔軟に対応できるカリキュラムの検討の必要性、を課題としてあげている。さらに、先の教員としての資質能力に加えて、高度専門職業人として認識されるために、学び続ける教員像の確立を提言しており、教員が探求力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠であると示している（文部科学省 2015）。

一方で、教育現場において、児童・生徒指導の問題、教科指導の問題に加えて保護者や教員間の問題等の理由から、教師効力感<sup>[1]</sup>を保てずに教師を続けることに負担を感じたり、実際に離職してしまうケースがある。また、不安と教師効力感の関係性を検討した西松（2005）は、授業実践不安の高い教師は、低い教師に比べて、個人的教授効力感<sup>[3]</sup>が低いことを報告している。また、経験のない新規採用教員が講師経験のある教員に比べて、授業実践の場面で高い不安を持ちながら、授業をしていることを明らかにしている。そのため、大学を卒業すると即戦力として期待される教員志望学生において、大学在学中に高い教師効力感を獲得しておく必要があると考えられる。教員養成課程において、実践的指導力を高め、教師効力感を高めることに繋がるものに、教育実習や模擬授業がある。教師効力感と教育実習の関係について、持留と有馬（1999）は、教育実習前後の個人的教師効力感と一般的教師効力感を比較し、教育実習が個人的効力感を高めることを示している。また、西松（2008）は、個人的効力感が教育実習を通して高まり、その効果は男性に強くあらわれる傾向があること、女性の教育実習不安を解消するように配慮することで多くの教育実習生の個人的教師効力感を高めることを示唆している。体育の模擬授業については、各大学により、ねらいや時期、実施人数、実施方法、省察の方法などの違いはあるが、多くの大学で模擬授業が展開され、その効果が認められている（長谷川 2016, 三木ほか 2011, 角南ほか 2017）。

このように、本研究対象者である小学校教諭を目指す女子大学生の体育授業の効力感について検討をすることは重要であると考えた。そこで、体育授業の教科指導における教師効力感について、教育実習や模

擬授業での実践的指導経験の有無との関係を検討することとした。また、教育実習や模擬授業だけではなく、小学校現場でのボランティア経験の有無も教師効力感と関連すると考え、その関係性についても検討を行うこととした。

## 2. 目的

小学校教諭を希望する学生の体育授業効力感について、実践的な指導場面の機会がある教育実習、模擬授業及び小学校等でのボランティア経験から検討し、体育授業効力感を高めるための方策を検討することを目的とした。

## 3. 方法

### (1) 調査対象者及び手続き

都内にあるA大学児童教育学科に所属し、小学校教諭を目指す女子大学4年生のうち、Googleフォームによる任意のアンケートに回答した43名のうち、回答に不備があったものを除いた41名（平均年齢21.8±0.52歳）であった。調査期間は2019年11月中旬から12月下旬であり、研究の説明文章を読み研究の目的を理解し、同意を得られた者から回答を得た。

### (2) 調査内容

本研究では、Tschannen-Moran and Hoy (2001) が作成した教師効力感尺度 (Ohio State teacher efficacy scale) の日本語版尺度を使用した (中嶋・久坂 2018)。本尺度は、「学級経営に対する教師効力感」「指導方略に対する教師効力感」「学生への関与に対する教師効力感」の3つの下位尺度から構成され、各8項目あり合計24項目であった。また、「指導方略に対する教師効力感」と「学生への関与に対する教師効力感」では、指導する教科によって教師効力感の値が異なる可能性が想定される。そのため、体育における指導場面について回答を求めた。回答は「1:まったく自信がない」～「6:とても自信がある」の6件法であり、それぞれ1点～6点で点数化した。また、フェイスシートにおいて、教育実習や模擬授業での体育指導経験の有無、ボランティア経験の有無について回答を得た。

### (3) 分析方法

日本語版の教師効力感尺度の教師効力感の平均得点及び標準偏差を算出した。また、日本語版の教師効力感尺度の下位尺度について、各尺度の平均得点及び標準偏差を算出し、ピアソンの積率相関分析を行った。さらに、教育実習及び模擬授業の指導経験の有無、及びボランティア経験の有無によって二群に分類し、平均得点と標準偏差を求め、t検定を行った。なお、統計処理にはIBM SPSS Statistics 24 (IBM社製)を用いた。

## 4. 結果

### (1) 各尺度の記述統計及び相関係数

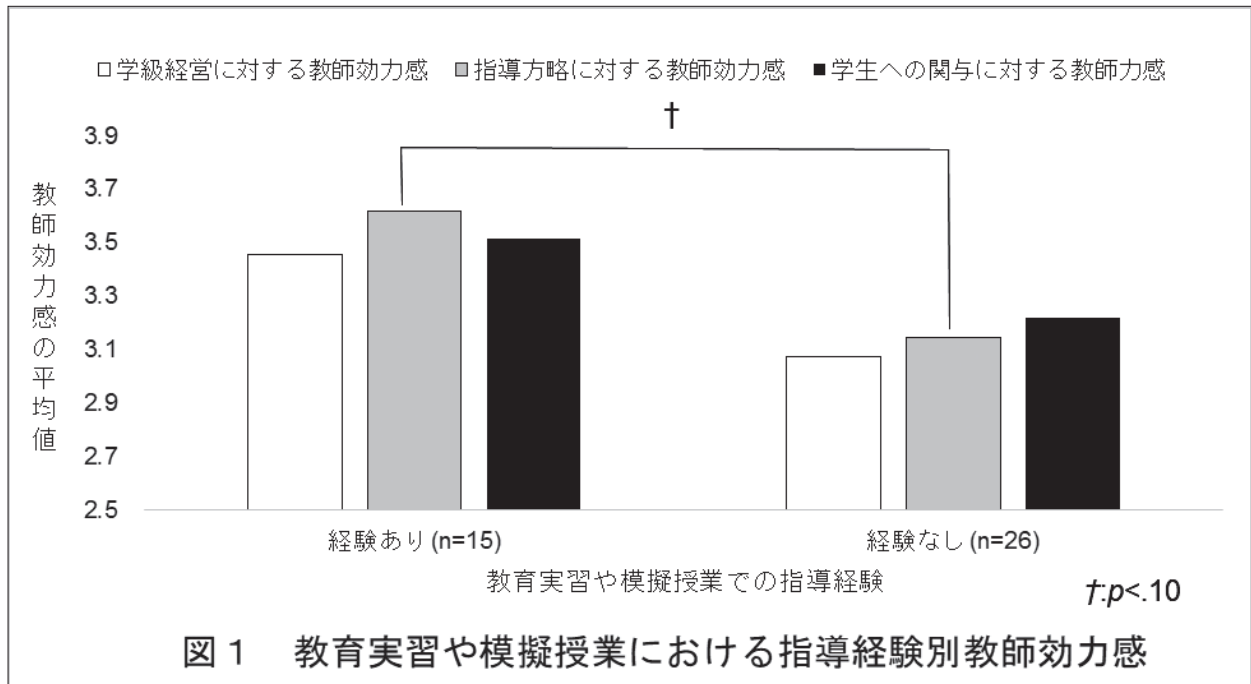
各下位尺度の平均値、標準偏差並びに下位尺度間の相関係数を表1に示した。下位尺度の平均得点は、「学級経営に対する教師効力感」は、3.22得点、「指導方略に対する教師効力感」は、3.32得点、「学生への関与に対する教師効力感」は、3.33得点であり、すべて理論的中間値の3.5を下回る結果となった。また、下位尺度間の相関係数は、「学級経営に対する教師効力感」と「指導方略に対する教師効力感」において $r=.84$ 、「学級経営に対する教師効力感」と「学生への関与に対する教師効力感」において $r=.86$ 、「指導方略に対する教師効力感」と「学生への関与に対する教師効力感」において $r=.90$ であり全ての尺度間において非常に高い有意な正の相関が認められた ( $p<.01$ )。

表1 各下位尺度の記述統計及び相関係数

下位尺度	M	SD	II	III
I.学級経営に対する教師効力感	3.22	0.88	.84**	.86**
II.指導方略に対する教師効力感	3.32	0.82		.90**
III.学生への関与に対する教師効力感	3.33	0.80		

\*\*: $p < .01$

(2) 教師効力感と教育実習や模擬授業における指導経験の関連



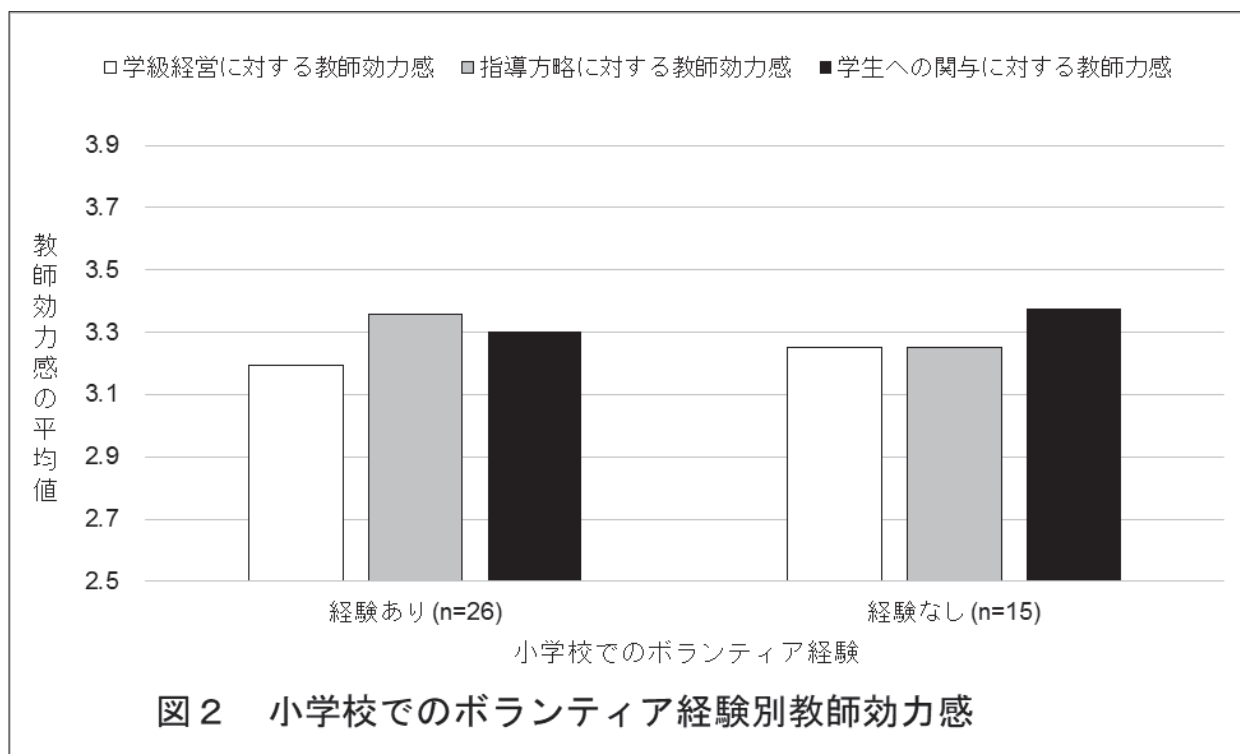
各教師効力感の平均値を教育実習や模擬授業での指導経験別にまとめた結果を図1に示した。なお、教育実習や模擬授業での指導経験については、経験ありが15名、経験なしが26名であり、それぞれ経験あり群、経験なし群として各下位尺度について平均得点を算出した。その結果、経験あり群の「学級経営に対する教師効力感」の平均得点は3.46得点、「指導方略に対する教師効力感」の平均得点は3.61得点、「学生への関与に対する教師効力感」の平均得点は3.51得点であった。また、経験なし群の「学級経営に対する教師効力感」の平均得点は3.07得点、「指導方略に対する教師効力感」の平均得点は3.14得点、「学生への関与に対する教師効力感」の平均得点は3.22得点であった。

全体では、教育実習や模擬授業での指導経験の有無と教師効力感には有意な差は認められなかった。そこで、下位尺度において、経験あり群と経験なし群についてt検定を行った結果、「指導方略に対する教師効力感」においてのみ、教育実習や模擬授業での指導経験がある学生の方が経験のない学生と比較して、指導方略に対する教師効力感が高い傾向が示された ( $p < .10$ )。

(3) 教師効力感と小学校でのボランティア経験の有無の関連

各教師効力感の平均値と標準偏差を小学校でのボランティア経験別にまとめた結果を図2に示した。なお、小学校でのボランティア経験については、経験ありが26名、経験なしが15名であり、それぞれの尺度について経験あり群、経験なし群の平均得点及び標準偏差を算出した。

全体では、小学校でのボランティア経験の有無と教師効力感には有意な差は認められなかった。そこで、下位尺度の検討を行ったがそれぞれの尺度において有意な差は認められなかった。



### 5. 考察

まず、本研究対象者の学級経営と体育授業の教科指導における教師効力感について検討をした結果、下位尺度の平均値は、すべて理論的中間値の3.5を下回っており、全体として教師効力感が低いことが明らかになった。また、下位尺度である「学級経営に対する教師効力感」「指導方略に対する教師効力感」「学生への関与に対する教師効力感」におけるそれぞれの関係性については、非常に高い有意な正の相関が認められたため、全ての効力感の関連性が非常に強いことが明らかとなった。川田（2018）は、女子学生においては、男子学生よりも運動に対しての苦手意識が高く、運動に対する好意性が低かったとしている。また、男子以上に小学校の体育指導に対する不安を強く感じていることや、女子では小学校での体育指導について「自分自身の運動能力」を不安視している者ほど、小学校での体育の授業を担当するに当たっての不安が高かったことを報告している（川田 2018）。さらに、女子大学生は不安感情が高く、教師効力感が低いことや、体育授業の実践に対しても自信が低いことが報告されている（前原ほか 2007 満武ほか 2016）。それらを考慮すると、本研究対象者においても同様の傾向が認められた可能性がある。そのため、まず、小学校教諭を目指す大学生自らが、運動を楽しみ運動に対する肯定的なイメージを持つことが期待される。そのための、運動遊びを中心とした評価や競争を強調せず、学生同士で学び合えるような養成課程での授業内容や教授方略が必要であろう。

中嶋・久坂（2018）の研究においては、現役の小学校教諭であり学級担任をしている者を対象として同様の調査を行った結果、下位尺度の平均値は全てにおいて3.5を上回っていたと報告している。本研究対象者は、学級担任の経験はなく、教科指導の経験も非常に少ないため、その実践経験が教師効力感の高低の違いに影響を及ぼしていると推察された。角南ほか（2017）が、体育系学部でない小学校教員養成学部にも所属するような運動技能レベルが高くない女子学生について模擬授業の効果を認めていることから、模擬授業を効果的に取り入れ、教科指導の経験を積むことで教師効力感を高めることに繋がると考えられる。

次に、教師効力感と教育実習や模擬授業での指導経験の有無について検討した結果、「指導方略に対する教師効力感」において、教育実習や模擬授業での指導経験のある学生の方が高い教師効力感を持っていることが明らかになった。教育実習や模擬授業において、指導経験がある方が指導方略に対して自信を感



じることができたと考えた。そのため、小学校教員希望学生が指導方略に対して高い教師効力感をもつためには、教育実習や模擬授業において積極的に教科指導を行うことがよいと考えられる。しかし、福田と中村（2008）は、教育実習において教育実習生は全教科の教科指導を経験できるわけではない。主として、国語、算数を担当する機会が多く、体育、家庭、図画工作や音楽のような実技教科の教科指導を経験する機会は非常に少ないという現状があると述べている。そのため、先述のとおり大学の授業内で体育の模擬授業を効果的に取り入れることが重要となろう。

最後に、教師効力感と小学校でのボランティア経験の有無について比較した。全体では有意な差が認められなかったため、下位尺度で検討を行ったがそれぞれの尺度においても有意な差は認められなかった。このことから、教師効力感と小学校でのボランティア経験の有無に関係がないことがわかった。ボランティアの内容や体験の仕方にもよるが、単に学級の様子を観察し、学習指導の補助をするのみでは、教師効力感を高めるには至らないということであろう。つまり、教育実習や模擬授業のように、児童の実態に即して、授業を計画し実行する過程で、試行錯誤し失敗や成功体験を重ねることで体育授業の効力感が高まるのであろう。

## 6. まとめと今後の課題

本研究は、小学校教諭を希望する学生の体育授業効力感について、教育実習、模擬授業、小学校等でのボランティア経験から検討し、体育授業効力感の育成について検討することを目的とした。

その結果は、以下のとおりであった。

- 1) 本研究対象者である小学校教諭を目指す大学生の教師効力感は、理論的中間値より低かった。
- 2) 下位尺度である「学級経営に対する教師効力感」、「指導方略に対する教師効力感」、「学生への関与に対する教師効力感」において非常に高い正の相関が認められた。
- 3) 「指導方略に対する教師効力感」において、教育実習や模擬授業での指導経験がある学生の方が経験のない学生と比較して、「指導方略に対する教師効力感」高い傾向が示された。
- 4) 小学校でのボランティア経験の有無と教師効力感には有意な差は認められなかった。

これらの結果より、養成段階である大学授業で体育の模擬授業による指導経験を積むことの重要性が確認された。また、学校現場での経験を積める重要な機会であるボランティアにおいては、体験の仕方が重要であることが示唆された。

なお、本研究の限界点として、有意傾向が示されたのみであり、結果の一般化には限界がある。また、他教科との比較を行っていないため、本研究で得られた結果は、体育授業特有の特徴であるとは限らない。

今後は、小学校教諭を目指す女子大学生の体育授業効力感の向上を促すための、模擬授業を実践し、検討を重ねていく必要がある。

## 注

- [1] 教師効力感とは Bandura (1977) が提唱した自己効力感<sup>[2]</sup> の概念をもとに、教師教育の分野に取り入れられ「教師が教育現場において、子どもの学習や発達に望ましい変化をもたらす教育的行為をとることができる、という教師の信念」と定義されている (Ashton, 1985)。
- [2] 自己効力感 (self efficacy) は「自分は、一定の結果を生じる行為を遂行できるという本人の信念あるいは期待感」と定義されている (Bandura, 1977)。
- [3] 教師効力感とは自分自身の教授能力に関する信念 (personal teaching efficacy: 個人的教師効力感) と教師の教育的な影響力に関する一般論としての信念 (teaching efficacy: 一般的教師効力感) の2つの因子から構成されている (Gibson&Dembo, 1984)

引用・参考文献

- Ashton,P.T. (1985) 「Motivation and the teacher sense of efficacy」 In C. Ames & R. Ames (Eds.) , Research on Motivation in Education, Vol.2, Academic Press, Cambridge MA,Pp. 141-171
- Bandura,A. (1977) 「Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change」 Psychological Review, 84:191-251
- 福田啓子・中村浩子 (2008) 「小学校教育実習における現状と展望 (Ⅱ) : アンケート調査を中心に」 東京家政大学研究紀要 48 (1) : 83-88
- Gibson,S and Dembo,M. (1984) 「 Teacher efficacy: A construct validation.」 Journal of Educational Psychology,76:569-582
- 長谷川望 (2016) 「模擬授業の振り返り方法の検討」 東邦学誌 45 (2) 99—107.
- 日野克博・高橋健夫・八代勉・吉野聡・藤井喜一 (2000) 「小学校における体育授業の評価と学級集団意識との関係」 体育学研究 45:599-610
- 川田裕樹・伊藤英之・村上佳司 (2017) 「『保健体育科目指導法』に関する科目への模擬授業導入による効果」 國學院大學教育開発支援機構紀要 8 : 49-58.
- 川田裕樹 (2018) 「初等科教育法 (体育) 受講者における運動への苦手意識と好意性および体育指導への不安—男女差に着目して—」 國學院大學人間開発学研究 9 : 23-37.
- 三木ひろみ・長谷川悦示・高橋建夫 (2004) わが国の教師養成の現状と課題. 大学・大学院における体育教師教育カリキュラム及び指導法に関する研究. 大学・大学院における体育教師カリキュラム及び指導法に関する研究. 研究代表者 高橋建夫、平成13年度～平成15年度科学研究費補助金 (基盤研究B) 研究報告書 : 50-58.
- 文部省 (2006) 中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度のあり方について」  
< [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm) > (参照日 : 2021年1月8日)
- 文部科学省 (2015) 中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員養成コミュニティの構築に向けて～ (答申)」  
< [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm) > (参照日 : 2021年1月8日)
- 持留英世・有馬広海 (1999) 「教師効力感に及ぼす教育実習効果」 福岡教育大学紀要 48 : 303-309.
- 中嶋彩華・久坂哲也 (2018) 「小学校教員の教師効力感と教員経験年数の関連の予備検討」 日本教育工学論文誌 42:57-60
- 西松秀樹 (2005) 「教師効力感と不安に関する研究」 滋賀大学教育学部紀要 教育科学 55 : 31-38.
- 西松秀樹 (2008) 「教師効力感、教育実習不安、教師志望度に及ぼす教育実習の効果」 キャリア教育研究 25:89-96
- 桜井茂男 (1992) 「教育学部生の教師効力感と学習理由」 奈良教育大学教育研究所紀要 28:91-101
- 角南良幸・高原和子・本山貢 (2017) 「小学校教員養成課程の体育科における模擬授業の効果」 -テキストマイニングによる自由記述形式の回答分に対する検討-」 福岡女学院大学大学院紀要 3 : 69-75.
- Tschannen-Moran,M. and Hoy,A.W. (2001) 「Teacher efficacy: capturing an elusive construct」 Teaching and Teacher Education, 17:783-805
- Woolfolk,A.E., & Hoy,W.K. (1990) 「Prospective teachers' sense of efficacy and beliefs about control」 Journal of Educational Psychology, 82:81-91